

# 白道会大会 池田行信（本願寺派総務）先生 現代社会と浄土真宗



池田行信先生

去る八月二十八日（金）から三十日（日）、白道会大会に池田行信先生をお招きし、法座と公開講演会のお話を頂戴しました。テーマは、法座、公開講演会ともに「現代社会と宗教」。池田先生は、栃木県慈願寺住職で東京仏教学院講師、本願寺派宗会議員で総務

宗会議員とは、国会議員のようなもので、本願寺は、日本の国会よりも早く議会制を導入しました。総長という役職が総理大臣、池田先生の勤める総務職は現在五人いて、大臣に相当します。総務になると二十四時間本山にスケジュールを管理されるのだそうです。そのような超多忙な中、「縁を結んで下さいました。紙数の都合で、各法座、公開講演会の概要だけご紹介します。

■「南無の人生観」 教師が卒業文集に生徒2名の通信簿を印刷した事件（埼玉県行田市の懲罰文集事件）があった。受験指導に熱心な教師だった。一方で、宿題に阿弥陀さまの絵を描いてきた子供にだけ点数をつけなかった先生を紹介。点数をつけなかった理由は、「たとえ子供が描いた絵とはいえ、阿弥陀さまに点数はつけられない。」という理由。点数という物差しで生きている人（人生）と、阿弥陀さまのみ教えを物差しとして生きている人（人生）、仏法に南無（帰依）する人生観についてのお話。

■「法としての念仏」 念仏は、「おまじない・呪文」ではなくて、「法」である。法とは「因果の道理」。一生懸命生きていくのに幸せになれない、まじめに生きているのに不幸ばかり続く、どうしてなんだろう、と迷う。念仏は迷わなくなる教え（法）。

■「宗教心の原点」 私たちが仏さまを拜む心の起こってくる、原点、理由。病院で悪性の癌かも知れないと言われて帰宅する途中、「俺はもうこの世界に戻れないかもしれない」と思う。この思いは哲学的には「自己とは何ぞや」という問いかけ。思い通にならない存在性の不安。

■他力本願とは 「他力本願は「他人まかせ」ということではない。

■「無財の七施」 お金がなくても誰でもできる七つの施し。犯罪が増加し、子供に自分の身を守ることを教えなければならぬ時代、人を信じる（信じない）ということをどう教えたらいのか、五木寛之さんが「門主に質問」。

■「宗教儀礼としての葬儀」（講演会） 「日本では野球監督が母の葬儀を欠席して仕事を優先することが美談として語られるが、オバマ大統領は6万人の集会をキャンセルして祖母の見舞いをした。現代日本は、いの中の本質が見えなくなっている。」という青木新門さんの記事を紹介（青木さんは、アカデミー賞映画『おくりびと』の原作者でありながら、受賞後その原作を辞退されたことで話題を呼んだ。また、「お金になる生活（労働）」と「お金にならない生活（定年後の生活に象徴的



満堂の参詣者。新聞を見たという一般参加も多かった。

間の条件』ハンナ・アレント著」と、近現代や、それ以前の労働観をたどりながら現代社会の問題性を指摘。

最後に、葬儀の意義を、①告別式（社会的意味）②癒し（個人的意味）③いのちのバトンタッチ（宗教的意味・括弧内は編集者の註釈）の三種に分析し、私は死んだらどうなるのか、死んだあの人はどこへいったのか、という問い③の重要性を指摘。はつきりバトンタッチができていないから、先祖が迷っている、祟る、などという宗教にだまされる、「本尊（仏さま）に手を合わせ、法名で葬式をすることの意義を話されました。

なボランティア  
ア・読書・音楽鑑賞などの  
「観照的生活」  
を取り上げ、  
「労働を全て  
において優先  
する価値観は  
人間に歪みを  
生じる」（『人